

問題設定力

1月24日（金）北陸中日新聞のコラムにおもしろい記事があった。

記者の大学時代の先生が、試験前に試験問題を教えてくれたそう。

「今年一年この講義で学んだことの中から自分で問題をつくり自ら解答せよ。」

その先生は、

「いい研究ができるかどうかは、どれだけいい問題を見つけることができるかなのです。

何をどう問うのか。それにつきますのです。」

と。

これは、授業設計や学校運営においてもいえることではなかろうか。

学力テストの点数が低い。何とかしたい。

繰り返し、繰り返し、ドリル問題をさせる。過去問題を解かせる。

しかし、活用力が低い、応用力が低いとの結果の繰り返し。

何か、解決すべき問題が存在しているのかを自らじっくり考えてみる必要があるのかもしれない。

いま、課題解決力育成が求められているが、子どもたちに、どうしたら学力が向上するか方法を考えさせ、実行させてみるのもおもしろい。先生や学校が必死になって取り組ませるより効果があるかもしれない。

最後に、大学の先生が出したような問題を現場で出してみたいが、どのように採点するか、規準が定まらず、結局出題することはできないだろうなあ。

おもしろく読ませてもらったコラムでした。

（追加）

先日、ある中学校へ行った。

理科室の掲示板に、「1年生がつくった問題」が掲示してあった。

かつてから、生徒による問題づくりが有効で実践もあった。

今、改めて考えてみると、学習内容が十分に理解されていて作問が可能になると思う。



そして、解答をつくり、理解が十分でない生徒にわかりやすく解説してあげる活動があったら申し分ない。

地道だが、この中学校理科で今後も続けてほしい活動だと感じた。